

旧山田橋の解体に伴う跡地空間のデザイン ～土木遺産の再利用に関する試み～

羽野 暁¹

¹第一工業大学 講師 自然環境工学科 (〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央1-10-2)
E-mail: s-hano@daiichi-koudai.ac.jp

Landscape Design of Former Local Heritage Site for Regional Revitalization

Satoshi HANO¹

¹Lecturer, Dept. of Civil and Environmental Engineering, Daiichi Univ. Institute of Technology
(Kokubu-Chuo 1-10-2, Kirishima-shi, Kagoshima-ken 899-4395, Japan)
E-mail: s-hano@daiichi-koudai.ac.jp

Abstract : In a local community, we think the intergenerational exchanges are effective for regional revitalization. At Yamada Area in Aira city, that is regional area of declining birthrate and aging population, we tried to create a community site for intergenerational exchange, thereby improving the occasion of rebuilding Yamada Bridge which is historical concrete bridge. This Yamada Bridge was constructed in early Showa era, and That has characteristic decorative shapes like Art Deco style, moreover, there are some episodes of inhabitants as a sequel of common using for a long time. In this paper, we propose a renovation design plan to reuse the parapets and newel post of rebuilding Yamada Bridge for monumental handrail of pocket park constructed at former site of Yamada Bridge Foot Plaza. In this space, we can be looking at flow of Yamada River that is one of civic pride at this area, and can feel atmosphere of riverside along by tasteful handrail. We expect that the pocket park space will become a place to inherit regional memories of elderlies and children, and will be loved by them.

Key Words : community design, local heritage, historical bridge, concrete parapet, concrete newel post, former site redevelopment, functional conversion, intergenerational exchanges, aging population, declining birthrate, regional revitalization, sustainable society

1. はじめに

本稿は、始良市山田地域に現存する昭和初期の土木遺産である山田橋の架け替えに際し、解体後に旧橋の橋詰に残る残地、および、道路付け替えに伴い生じる兩岸の残地の公園化に向け実施した土木遺産の跡地デザインについて報告するものである。

山田橋が架かる始良市の山田地域は少子高齢化が進む中山間地域であるが、潜在的に多くの活性化資源を有している。藩政期の山田麓の面影が残る街並みや、国登録有形文化財であり地域のアイデンティ

ティとなっている「山田の凱旋門」のほか、西郷隆盛が西南戦争敗走時に休憩したとされる「西郷どんの腰掛け石」や、南九州の農村文化である田の神様の石像、地域に愛される清流・山田川など豊かな歴史、文化、自然を多く有している。

筆者らは山田橋とこれらの地域資源に着目した活動を継続し、過年度報告においては、山田橋の架け替えに伴う高欄のベンチ再利用プランを提案した¹⁾。本稿で報告する山田橋架け替えに伴う兩岸跡地の公園デザインは、同プランの核となるものである。山田橋は昭和4年に建設された意匠性の豊かな土木

遺産であり、同橋が架かる山田地域は大きな活性化潜在性を有する地域であるが、山田橋および山田地域の詳細は過年度報告に記載し¹⁾、本稿では省略したい。

2. 山田校区まちづくりプラン

山田橋は、鹿児島県始良市の山田地域に残る昭和4年竣工の鉄筋コンクリート橋である。橋上の親柱や高欄には大正～昭和初期の意匠流行に沿ったアール・デコ調の造形がみられ文化的価値が高く、橋長は60mであり、親柱や高欄が当時の形状で現存する鉄筋コンクリート造の長大橋としては鹿児島県内最古である。筆者らはこれまで、様々な取り組みを通して同橋の価値を啓蒙したが²⁾、河川治水の観点から山田橋の保存は叶わず新設橋の竣工とともに解体撤去が決定した。

山田橋が架かる山田地域は、山田小学校を中心とした山田校区に含まれる。始良市は市内の各校区ごとにコミュニティ協議会を設け地域活動を促しているが、山田校区コミュニティ協議会は平成29年度に山田校区まちづくりプランを策定した。同プランは山田校区の将来計画を定めたものであるが、観光まちづくりの柱として、解体される山田橋の高欄をベンチとして再利用する計画を掲載している(図-1～図-6)。

豊かな水と緑あふれる山田の里づくり

～旧山田橋の高欄ベンチ再利用による5つのまちづくり整備方針～

1. 地域の誇り『山田の凱旋門』を活かした“背骨”づくり

凱旋門から旧山田橋を経由して西田の田の神様を結ぶ山田麓のメインストリートに、『山田の凱旋門通り』として、歴史・文化・自然を感じる山田の“背骨”のような中心的街路として整備する。

2. 観光活性化に資する“水と緑の景”づくり

“背骨”の要所となる凱旋門および山田橋跡地を緑地公園とし、“緑の景”を整備する。凱旋門および招魂社一帯は、緑あふれる歴史公園として整備し、地域内外からの来訪者増加を期待する。山田橋跡地は、小さな緑のポケットパークを整備する。凱旋門公園と旧山田橋の橋詰公園が創り出す緑の空間が、周辺の自然環境とつながり、居心地の良い緑の雰囲気を作り出す。

また、豊かな水文化を伝える山田川、各用水路、宇都川と出会う“水の景”を整備する。特に旧山田橋の橋詰公園は、山田川を望む緑地公園として、水と緑の雰囲気があふれる空間を創出し、観光活性化を期待する。

3. 福祉および観光を促進する“歴史風情ある散策路”づくり

地域に点在する史跡等を巡り、山田麓の歴史を感じる石塀や小径、古くから営農を支えた水系基盤や河川と出会う“歴史風情ある散策路”を整備する。市観光協会等と連携しフットパスコースとして観光振興を期待するのみならず、日常的な散策コースとして福祉環境を促進する。

4. 次世代の郷土愛を育む“学びの場・気づきの場”づくり

子供たちが、山田の歴史・文化・自然を学び、地域らしさに気づき、愛着を醸成する機会となる“場”を創る。

5. 世代間交流を促進する“ふれあいの場”づくり

散策、休憩、遊び、井戸端会議等を通して、日常的にお互いが見守り、見守られる機会となる“場”を創る。

図-1 旧山田橋の高欄ベンチ再利用による5つのまちづくり整備方針(山田校区まちづくりプラン)



図-2 旧山田橋高欄ベンチ再利用計画(山田校区まちづくりプラン)

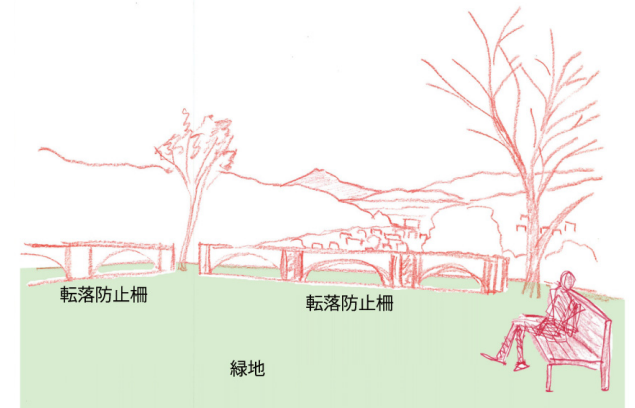


図-3 再利用イメージ/招魂社(山田校区まちづくりプラン)

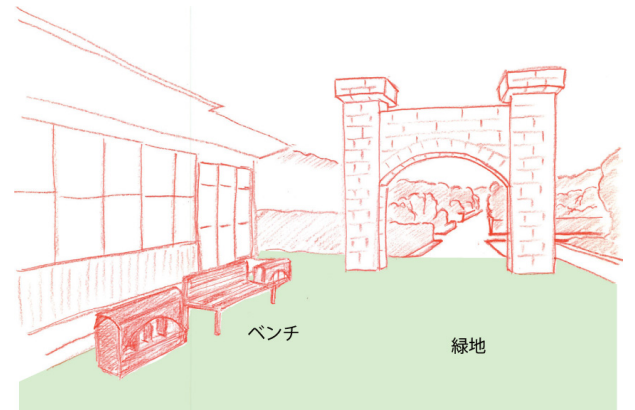


図-4 再利用イメージ/山田の凱旋門(山田校区まちづくりプラン)

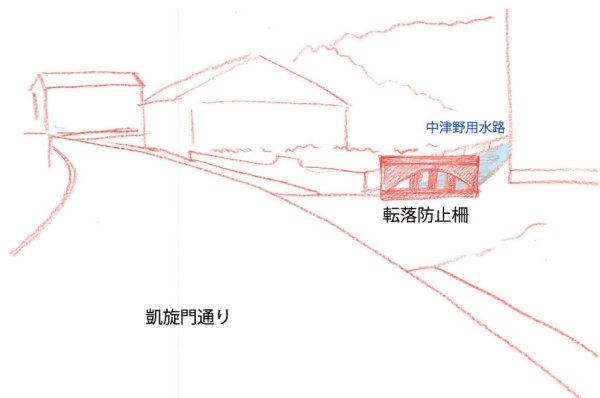


図-5 再利用イメージ/凱旋門通り (山田校区まちづくりプラン)

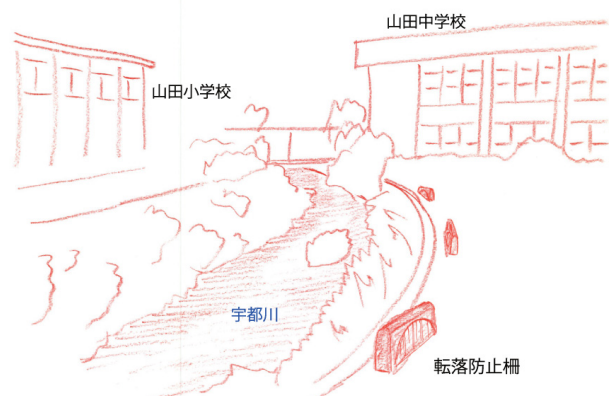


図-6 再利用イメージ/宇都川 (山田校区まちづくりプラン)

3. 山田橋兩岸の跡地デザイン

山田橋の新設橋の竣工により、旧橋の兩岸に道路付け替えに伴う残地が発生する(図-7)。新設橋の竣工まで、旧橋は地域の往来を支え、山田小学校の児童にとっては毎日の通学路になっていた。道路付け替え後も、兩岸の残地には付け替え前の生活動線の記憶が残ると考えられるが、筆者らはこの残地を緑道および公園として整備することを提案した。山田川を望む橋詰広場は緑地公園として整備し、転落防止柵として山田橋の高欄を移築し再利用することを提案した。高欄の再利用により歴史感のある雰囲気醸成するとともに、重厚感のある高欄で橋詰公園を囲み、利用者に安心感を与える効果を期待した。兩岸の橋詰公園からは、旧山田橋の供用時と同様の眺めを提供したい。旧橋の高欄は転落防止用柵として現行基準の高さに満たないが、不足高さは基部のかさ上げにより対応する。旧橋高欄の移築に際しては、苔類や蔦類など表面の植生を残し、洗浄等により歴史的な風合いを損なわずに施工する。移築高欄のコーナー部は、旧橋親柱の意匠を踏襲した新設コンクリート柱により雰囲気を収める。これらの工夫により、旧橋の記憶を継承しつつ新たな利用を促す場所の創出を目指した(図-8～図-14)。

山田橋
橋詰現地写真



図-7 新設された山田橋を含む旧山田橋の周辺状況



図-8 旧山田橋の跡地公園のコンセプトイメージ

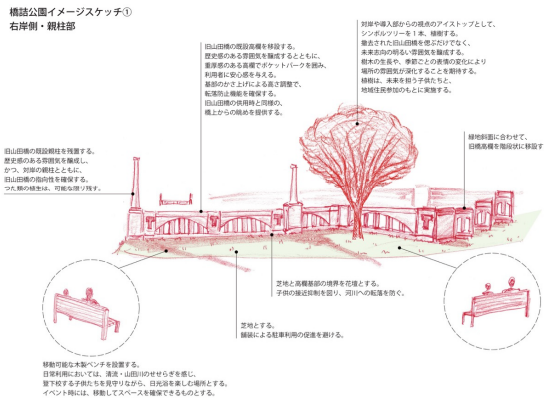


図-9 旧山田橋の跡地公園 (右岸側・橋詰)

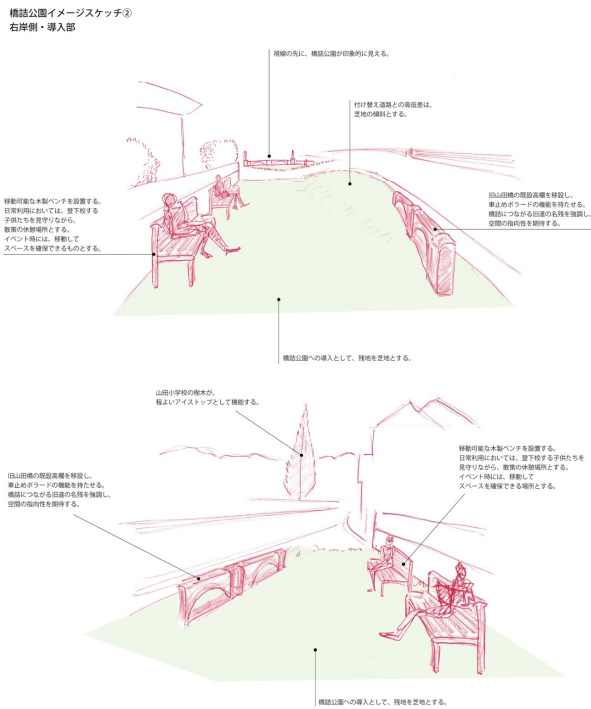


図-10 旧山田橋の跡地公園 (右岸側・緑道)

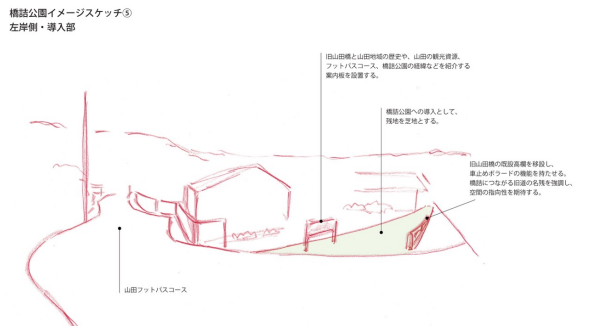


図-11 旧山田橋の跡地公園 (左岸側・緑道)

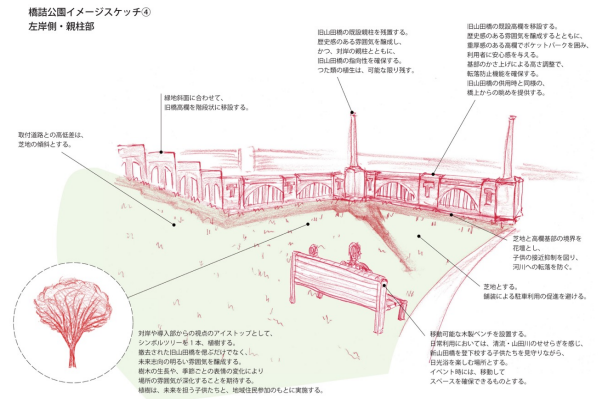


図-12 旧山田橋の跡地公園 (左岸側・橋詰)



図-13 旧山田橋の跡地公園のイメージモンタージュ

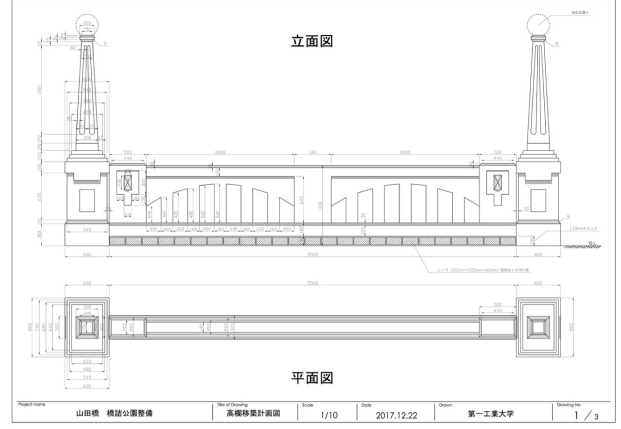


図-14 旧山田橋の高欄構築概要図 (一部抜粋)

参考文献

- 1) 拙稿：地域活性化に資する「小さな拠点」デザイン～土木遺産の再利用に関する一提案～，第一工業大学研究報告，第29号，pp.57-61，2017.3
- 2) 拙稿：土木遺産の利活用に向けた地域の記憶の共有化に関する試み，第一工業大学研究報告，第28号，pp.61-68，2016.9